# 軟弱男

作＝元(hajime)



## 第一章

野村高夫。３１歳。某大学を卒業後、建築会社に７年間勤め退職。
その後はブラブラとした生活で就職活動をするも断られるとすぐにあきらめてしまう。
そんな彼の悲惨な日常生活をこれから紹介しようと思います。

野村「はい！　本当ですか！　それでは早速明日伺います」
　野村は求人雑誌でみかけたコンビニのアルバイトに募集をしたのだ。そして面接も合格し、晴れて野村の第２の人生が幕を開けた。

【翌日】
店長「それじゃ、今日から働いてもらいます。最初はレジを担当してください、何か分からない事があったら香織ちゃんに聞いてください」
野村（かおりちゃん？）
　香織ちゃんとはここのコンビニで働いている高校２年生の女の子だ。顔は幼く可愛いんだがも

のすごく気が強い。
野村「野村と言います、よろしくお願いします」
香織「よろしくお願いします」
店長「それじゃあ、仲良くね。ちょっと出掛けてくるから」

；ピッピピ、ピピ；；
野村（あっ！また間違えてしまった・・・）
不器用な野村は何度レジを打っても上手くならない。見かねた香織は野村の代わりにレジを打つ。
香織「あーもういいです、私やるんで駐車場の掃除でもしてきて下さい。」
野村（あー；初日から間違えてばっかりだ）

駐車場の掃除を終えた野村が店に戻って来た。
野村「掃除終わりました」
香織「ごくろうさま」
野村（何なんだこの子っ！いくら先輩だからって態度がでか過ぎる！）
何か言いたそうな目で香織をジロジロと見つめる野村。



香織「何ですか？」
野村「別に・・・」
野村の急な横柄な態度にますます機嫌を悪くする香織。
客がレジに向かって来る。野村の担当するレジに来た。慌てる野村。
レジを打つが・・・・；ピッピピ、ピピッピーーーーーー
野村（ちくしょうーっ、何でこんな時に・・・）
横で香織が何か言いたそうな目で見ている。結局、野村のミスでレジがバクってしまい香織のレジで会計を済ます客。
悔しそうな表情の野村、横で勝ち誇った顔の香織。と、その時、野村が舌打ちをした。
香織（っ！！）
香織「何っ？何か言いたい事でもあるの？」
野村「・・・・」
あえて無視をする野村。その態度に香織が；ぶちキレ；；た。
香織「おいっ！新人のくせにいい根性してんじゃんお前！」
香織の態度や言葉づかいが急変しビックリする野村。慌てて謝ろうとするがもう遅い。
ドシッ！！
野村の横っ腹に香織の蹴りが跳ぶ。客はその事に誰一人気付いていない。

野村「い、いやぁ違うんですよ、」
香織「はぁ？　何が違うんだよ、レジもまともに打てないくせにでかい口たたくなよ！」
　その言葉にムッとなる野村。
香織「何っ！　まだやるのっ？」
野村「い、いぇ・・・」
　ちょうどそこへ客が来た。
香織「ほらっ！お客さんだよっ、ちゃんと相手してあげなきゃ」
　と、野村を前に押しこくり、そのやりとりに不自然な顔をする客。頭の中が真っ白になる野村をさらに悲劇が襲いかかる。
；　ピーピピッピピーー；
　数字を打ち間違える野村
　ドスンッ！！
　物凄く鈍い音がした。
野村「うぅぅわぁぁ！！」
　店内に響きわたるその奇声。レジを打ち間違えた野村を香織が後ろから金玉めがけて膝蹴りしたのだ。金玉のどちらかが潰れたと確信した。
　しかし、玉は潰れてはいなかった。テーブルの上に両手を着きながらグズグズとゆっくり倒れ



こむ野村。その光景を見ていた客は「もう、いいです」と言い、店から出て行った。他の客達も何事かとこちらを覗き込む。
香織「帰っちゃったじゃん！何してんのお前、バイトなんかやめちまえよ！」
　うずくまったままの野村、目には涙が・・・
香織「どうなんだよ！・・・聞いてんだから答えろよっ！」
　香織はうずくまっている野村の襟を掴んで起き上がらせ膝蹴りを5発股間に向けて連打した。
野村「ああっ！！　ああっ！！　うぅああっ！！　痛いなーあぁ！　もう！！」
香織（ちっ！！）
　野村が発したその絶叫で店にいた客全員が外へ逃げて行った。
香織「でかい声出してんなよ、私が疑われるだろ！　バーカ！」
野村「・・・うぅぅぅ・・・なんで蹴るんですかぁ・・・・・・口で言えばいいじゃないですか・・・・」
香織「おいっ！」
　野村の髪の毛を掴み顔を向けさせ睨みつける香織。
香織「口ごたえしてんじゃねえよ！口で言っても分からないから体で教えてやってんだよ！」
　と、その時。

男女「おはようー！　あ、香織ちゃん誰この人？」
香織「おはようございます。今日新しく入った野村さんです。」
　この男女とはここのコンビニの深夜のアルバイトをしている瀬川智徳と滝澤奈緒美だ。
瀬川「瀬川です。よろしくお願いしますね」
滝澤「滝澤ですよろしくお願いします」
　香織から暴力を振るわれて引き攣って浮かない顔の野村に香織が２人に気付かれないように野村のお尻をつねりあげ合図する。
野村（ひっ！！）
瀬川「大丈夫ですか？　初日で疲れたんでしょう、顔が引き攣ってますよ」
　香織が野村にアイコンタクトをとる。
野村「あ、はい。しょ、初日で疲れました・・・」
　そして香織が上に取り付けてある防犯用の監視カメラを取り外している。
香織「なんか、テープが終わっちゃったみたいで、」
瀬川「あ、そうなんだ」
　野村が怪しそうな目で見ている。つかさず香織が野村を睨みつける。目をそらして普通の顔に戻す野村。
瀬川・滝澤「それじゃ、おつかれ、野村さんもおつかれさま」



香織「おつかれさま！」
野村「お、おつかれさまですぅ・・・」
　夕方の４時から出勤してもう１０時。野村にとっては長く感じたことだろう。しかし悲劇はそれだけでは終わらなかった。

【男子更衣室】
野村「ブツブツ・・・今夜店長に連絡してこの仕事を辞めるように言おう」
　ガタンッ！！
野村（っ！！）
香織「何、ブツブツ言ってのよっ！　あんたさぁ、今日の事誰かに言ったら玉がなくなるだけじゃすまなくなるよ、本当に」
野村「だ、誰にも言いませんよ」
香織「それとさっき、バイト辞めるとかなんとかって言ってたけど、辞めたらどうなるかわかるよねえ！」
野村「へっ？・・・」
香織「お前が辞めたら私が今日やった事バラされる可能性があるから」
　そう言いながら先程取り外した監視カメラのテープを抜き出し破ってグシャグシャにしてポケ

ットにしまう香織。
そうかと思うと急に野村の胸ぐらを掴み顔を近づけて
香織「学校にバレたら退学になるんだよ、うちの学校厳しいからさぁ。分かってるよねっ！」
野村「わ、分かりました。絶対に誰にも言いません」
香織「携帯貸して」
野村「え、な、何に使うんですが？」
野村を睨みつける香織。
香織「いいから貸せよっ！　お前は言われた事だけやってればいいんだよ！」
野村の携帯番号を自分の携帯に登録する香織。
香織「いい！　あんたは私に監視されているのと同じなんだからね！　勝手な行動するなよっ！」
野村（ええええっーーーーー）
顔が強張る野村。
香織「何っ！　何か言いたそうな顔してるんじゃん！」
野村「い、いえ」
香織「まぁ、そういう事だから、長い付き合いになりそうだねっ！」
ドカンッ！！
帰り際に香織が野村の腰をとび蹴りし、野村はロッカーに叩きつけられた。



香織が出て行ってから椅子に座って涙を流しまくる野村。
野村（あんな態度やあんな事言わなきゃ良かった）
そう思っても、もう手遅れなのだ。

第二章

【自宅】
１０月１２日（土）午前８時２０分
１人自宅で布団に包まっている野村。今日は休みだっていうのに憂鬱な気分だ。
考えれば考えるほど胸が痛くなり今後の不安が頭を遮る。
野村「まだ８時過ぎか・・・」
そう言うと、また布団に潜りこむ。
午後１２時５０分
スルスル！！　スルスル！！
カップラーメンのすする音が室内に虚しく響きわたる。
と、その時；♪♪♪♪，携帯電話の着信音が鳴った。

その電話が悲劇に繋がるとは・・・

野村（っ！！香織からだ！どうしようっ、このまま出ないで放っとこうか・・・）

；　♪♪♪♪，　机の上の着信音が鳴り続ける。

野村（いやダメだ！出なかったら何故出なかったのか問い詰められる。・・そして、また・・・）

野村高夫はこの時、携帯電話の着信音がどれだけ恐ろしく聴こえたのだろう。

ピッ！

野村「はぃ野村ですぅ・・・」

香織「出るのが遅せえんだよっ！　何やってたんだよ！」

野村「す、すみません、ちょっとトイレに行ってて・・・」

香織「そんな事、私に関係あるかよ！」

野村「よ、用件は何ですか？」

香織「！！何？　誰に聞いてんの？　用件は何ですかってなんなのその態度っ！！」

野村「い、いえ、ち、違うんですよぉ・・・だ、だからそのつまり・・・」

香織「下手な言い訳してんじゃねえよっ！言葉気をつけろ！」

野村「はぃ・・・」

香織「今日さ、私シフトに入ってんだけど夜１０時に終わるんだ、寒くなってきたから１０時に



迎えに来てくれない？」

野村「・・・」

香織「何考えてんのよ？　迎えに来てくれるよねぇ？」

野村「は、はい。分かりました。む、迎えに行きます」

香織「逃げるなよ！　ちゃんと来いよっ、もし来なかったらお前の粗ちん、一生使えなくしてやるからなっ！」

野村（ヒヒィッー！！）

香織「ふんっ！」

ピッ！

香織が携帯電話を切った。

野村「ああー！！、だから今日は何か嫌な事があると思ったんだぁ・・・」

この時、野村高夫はコンビ二でアルバイトした事を心底後悔したという。

野村（たかが１７歳の女の子相手にビシッと一言、言えないなんてなんて俺は情けないんだ）

時間が経つにつれ、だんだん緊張してくる野村。胃が痛くなる。

午後９時、美味しくもない夕飯を終え、出掛ける準備をする。

野村（あいつのことだ。３０分前には待ってないと何されるか分からないな）

そう言うと野村は車を出し、香織が待つコンビニへ向かった。

【コンビニの駐車場】

車内から店内の様子をうかがう。

客を接客する香織。客に語りかけるそのしぐさと幼い顔つき、とても可愛いらしい。その笑顔を見る限りとても優しい純粋な美少女にしか思えない。

香織が仕事を終え倉庫へ入って行った。

１０分後、香織が店から出て来た。香織は駐車場を見回し、野村がいた事を確認するとこちらへ向かって来た。

ミニスカート姿の制服の彼女に野村が思わずお辞儀をしてしまう。それを知ってか知らずか無視をする香織。

ガチャッ！！　ドアが開かれる。

香織「早かったね、３０分位前から来てたでしょ」

野村「えぇっ？」

香織「ずっと私の方見てたでしょ、こっちからも全部見えてたよ」

野村「はぁ・・・」

香織「何想像してたの？　んん？」



野村「い、いや別に何も・・・」

ギュッ！！

野村の耳たぶを思いっきりつねり上げる香織。

野村「い、痛い！　ほ、本当に何も・・・」

ドンッ！！

今度は野村の左足を助手席から蹴飛ばした。

野村（うぅぅぅん、また暴力か！　だから嫌なんだ！）

香織「いいから車出して！」

野村「はぃ・・・」

車は駐車場から出ようとしている

野村「それで、家はどこですか？」

香織「チッ！」

舌打ちをする香織。しまった！！　という顔の野村。

香織「ムカツクー！　そういう反抗的な態度とるなって言ってんだよっ！」

野村「あ、ごめんなさい・・・」

香織「私さぁ、晩御飯食べてないんだよね」

野村「？」

香織「すぐ気付けよっ！　食べてないんだよねっ？」
野村「あぁ～、わ、分かりました。どこに行けばいいですか？」
香織「ファミレスでいいよ」
野村「あ、はい」
　２人の乗った車は２４時間営業のファミリーレストランへと向かった。
　その間、野村は香織に散々罵られ、こづかれた事は言うまでもない。

【ファミリーレストラン】
　ギィィー
　ドアを開けて店内に入る２人。中にはたくさんの若者たちが・・・
　夜の１０時過ぎに３０代の冴えないおじさんとミニスカート姿の可愛い女子高生が店内を歩く。
　その光景を見た他の客たちは援助交際だと思ったに違いない。
野村（援助交際させられてるのは俺の方だ！　問答無用に呼び出され、食事をおごらされ（多分）、暴力を振るわれ、Ｈな事までされる？）
　席に着く２人。さっそくメニューを見る香織。やっぱりその見つめる笑顔はどこから見ても美少女だ。



香織「ビーフシチュー、チキンドリア、フライドポテト、チョコレートパフェ、オレンジジュース。とりあえずそれでいいよ」
野村（；とりあえずそれでいいよ；って誰がお金払うと思ってんだ！）
香織「何してんのっ！早く頼んでよっ」
　注文をとる野村。
野村「ビーフシチュー、チキンドリア、フライドポテト、チョコレートパフェ、オレンジジュース、コーヒーをお願いします。」
ウェイトレス「はい、かしこまりました。メニューをお下げします」
　・・・・・・・・・・
香織「今日さぁ、店長に注意受けたんだけど・・・あんたのせいだからねっ！」
野村「え、えぇっ」
香織「え、じゃねえだろっ！この前、お前が店で絶叫して客から苦情がきたんだよっ！　この責任はちゃんととってもらうからねっ！」
野村「えっ、そ、それで店長には何て報告したんですか？」
香織「いいじゃん別に、あんたにそんな事教える必要ないでしょっ」
　時間が経つこと１０分、コーヒーとオレンジジュース、フライドポテトが運ばれる。
　もちろん香織は野村に分ける事なく１人で食べ、次々と運ばれる食事に香織は美味しそうに食

べている。
野村（こうやって見ているると可愛いんだけどな・・・」
香織「何見てんだよっ」
　フゥッ！！
　香織が食べてるチキンドリアを野村の前に吐き出した。
香織「御飯食べたの？　ほらそこにドリアがあるよ、食べればっ」
野村（口から吐き出した物を・・・汚い・・・何言ってんだ、この子は？）
香織「食べられないんだぁ？・・・」
野村「・・・」
　ドスンッ！！
野村「うぅっ！い、痛いぃ・・・」
　野村の股間目掛けて香織がテーブルの下から蹴り上げのだ。
香織「どうする？素直に食べるか、このまま食べずに大勢の前で辱められるか、どっちがいい？」
野村「食べます・・・」
テーブルの上の汚物を吸い取るように食べる野村。それを見て吹きだしそうになる香織。
・・・・・・・・・・・・
　３０分が経ち店を出る２人。会計をする野村。



野村（やっぱり俺が支払うんだぁー）
ウェイトレス「２４５０円になります」
　なけなしのお金を渋々出す野村。

【車】
　バタンッ！！
　車に乗る２人、また走り出す。
　野村はせっかくの休日を潰されたあげく食事をおごらされ、ちょっとした暴力も受け怒りは頂点に達していた。
香織「美味しかった？」
野村「・・・」
香織「だから無視するなって言ってんだよっ！　おい！」
野村「はぃ」
香織「何、その返事の仕方っ、もの凄く気にくわないんだよねっ」
　ドンッ！！
　また野村の左足を助手席から蹴飛ばす香織。
野村「はぃ」

香織「それはそうと、さっきの話、どう責任とってくれる訳？」
野村「だ、だってそれは・・・」
香織「”だってそれは何？”聞いてあげるから言ってみなっ」
野村「だってそれは、もとはといえばあなたが膝蹴りなんかしたから・・・」
野村（言ってしまった！！）
香織「っっ！！」
香織の表情が見る見るうちに変わっていった。
香織「クソッ！　てめぇー、誰に口聞いてんだよっ！」
運転する野村の胸ぐらを掴み激しく詰め寄る香織。
野村「うぅぃっ！・・・」
香織「おいこらぁっ！　車止めろっ！　早く止めろっ！！」
野村は手が震えている。
香織「てめぇー本当にいい根性してるよなっ！　喧嘩売ってんなら買ってやるよっ！　弱いくせにっ！」
取り返しのつかない事をしてしまった野村。
香織「降りろよっ！　早く降りろっ！　”コテンパン”にしてやるからなっ！！」
野村（ドクン！　ドクン！　ドクン！　ドクン！）



野村の心臓の鼓動はいつになっても止まることはなかった。

## 第三章

深夜１１時、車のサーチライトがアパートとその駐車場を照らす。
止められた車。中からは異様な空気が漂っている。
鼻から出血をしている野村。
野村「ここが、そうです」
野村は香織に自宅を教えろと言われ、家までやって来た。
カタン！　カタン！　カタン！　カタン！
階段をのぼる足音が響く。足取りの重い野村。部屋の前に到着し、カギを開ける。
香織「早く開けろ」
香織にせかされる野村。ガチャッ！カギが開き部屋に入る２人。
入るや否やその途端に、香織は野村の髪の毛を掴みあげ壁に叩きつける。
ドンッ！！　ドンッ！！　ドンッ！！
野村（もう、どうにでもなれ・・・）
髪の毛を掴んだまま股間におもいっきり膝蹴りをし、その体勢で鉄拳をみぞおちに７発喰らわ

す。
「ギャアー！！　ウウウッ！！　ウウウウッ！！　ウォエェッー！！」
部屋中に男性の悲鳴が響きわたる・・・
香織「そんなに大きな声出したら、ご近所に迷惑でしょう」
ドカァッ！！
あざ笑いしながら、回し蹴りを急所めがけて連打、連打の嵐。
ガクリと崩れ落ちる野村。
香織「口を大きく開けろぉ！」
そう言うと、香織はスカートの下に手を伸ばし穿いていたパンティーを脱ぎ、それを野村の口へ無理やり詰め込んだ。
香織「お前が悪いんだからなっ！」
そして、口に詰められたパンティーの上をガムテープで取れないように塞ぎ、両手もガムテープでグルグル巻きにして縛り、
野村を壁に寄りかかせてズボンのチャックを外し、ズボンを脱がさせ半裸にさせた。
香織「フフフ！！　いい格好じゃん！！　フフフ！！」
笑いながら侮辱するその姿の奥に秘められた、なんとも恐ろしい性。
香織「ほぉらっ、足広げろ！　言われる前に気付けよっ！　何度も言ってんだろ」



野村「ムグゥゥ・・・」
香織「何言ってるか全然分からないんだけど」
バチンッ！！　バチンッ！！　バシッ！！　バチンッ！！
蹴り、蹴り、蹴りの連続で金玉が赤く腫れ上がり、気絶寸前の野村。
パチンッ！！　パチンッ！！　パチンッ！！　パチンッ！！
気絶しそうになる野村を、強烈な往復ビンタで目を覚まさせる。
香織「眠るなよっ、眠ったら熱湯ぶっかけるからなっ！」
野村「ムウゥゥゥッ〃〃〃〃」
首を横に激しく振る野村。
香織「そこの卓袱台の上に乗りなっ」
卓袱台の上に乗る野村。
香織「ケツをこっちに向けろ！」
恥ずかしいながらもお尻を香織の方に向ける野村。
香織「丸見えだよっ！　バッカじゃないのっ？」
香織は野村の肛門を力いっぱいこじ開け、臭いを嗅ぐ。
香織「くっさーい、お前ちゃんと洗ってんのかよっ」
恥ずかしくて恥ずかしくて顔を上げることが出来ない野村。

そして香織は、卓袱台の隅に置いてあった空のビール瓶を手に取り、それを野村の肛門にぶち込んだ！
野村「ヒィィヤァァ！！　ウワァァ！！」
全身が痺れ、声にならないほどの奇声をあげ、体をねじらせ卓袱台の上から転げ落ちる。
ズポ！！　ズポ！！　ズポ！！　ズポ！！
香織はビール瓶を奥までねじ込む。
香織「抜いてほしい？」
野村「□△×○□△×○・・・・」
必死に抜いて下さいと懇願する野村。
香織「あ～、何言ってるのかなぁ～？　もっと入れてほしいって？」
香織は口に押し込められているパンティーを取ってやった。
野村「うぅ・・お願いします、抜いて下さい・・・」
香織「うん、ヤダッ！」
ズポ！！　ズポ！！　ズポ！！

・・・・・・・・・・・・・・



香織「もうそろそろ抜いてやるか」
肛門から抜いたビール瓶にはウンコと血が混じっていた。
香織「汚ねぇー、きれいにしなっ！」
嫌がる野村の髪の毛を掴み無理やりウンコと血が付いたビール瓶を舐めさせる香織。
野村「ウオェッ！　ペッ！　ペッ！」
あまりの臭さに嘔吐をしそうになる。
香織「吐くなよぉ」

・・・・・・・・・・・・・・

香織「フフフ・・・」
何かいい案でも思いついたのか、笑みを浮かべる香織。
棚に置いてあったライターを手に取り、野村の顔に近づける。
カチッ！！　カチッ！！
炎が野村の目の前で揺れる。
香織「しっかり、ケツ出せよ！」
野村（・・・えっ、まさか・・・）

ライターが勢いよく野村の肛門に滑込んだ。
香織「いくよぉ」
カチッ！！
肛門の中で火がついた
野村「ふっ！！」
野村（“※□△×○□※△×○”）
“ガクリ”　野村は膝から崩れ落ちるようにして卓袱台の上から転げ落ち失神してしまった。
もう、すでに野村の頭の中は錯乱状態だった、それもそのはずだ。
ライターをお尻の穴の中に突っ込まれ、その状態で火を放されたのだ、失神してしまうのも無理もない。
香織（“バカな奴”）
野村に向かってそう吐き捨てると、香織はアパートの部屋から出て行った。
惨めな格好で床に倒れるようにして寝ている野村。

・・・外は寒く何もなかったかの様に月がアパートを照らして夜は更けていった・・・・

【翌日】



バイトを休みたいと店長に連絡をする野村。
野村（今日は何もしたくない・・・）
布団にうずくまって1日を過ごす・・・

【市立図書館】
女子大生とお喋りをしている香織。女子大生とは中学時代の先輩、青柳さやか１９歳だ。
２人は最近、自分の周りで起こった事や気になった事を他愛もなく話している。
早速、香織は野村の事を話題にする。
香織「この前、バイト先に新しい人が入ったんですけど、まじでつかえないんですよ、男なんですけど」
さやか「え～、そうなの？」
香織「初日から間違えてばかりだし、新人なのに態度がでかかったりして・・・」
さやか「それで、香織はどうしたの？」
香織「まじで、むかついたんでいじめてやりましたよ」
さやか「うそー？」
香織「カウンター内でいたぶっちゃいました」
さやか「それで男の人は？」

香織「ワァーワァー悲鳴あげてましたよー」
さやか「プゥッ！　ハハハハハハ！！」
香織「笑い事じゃありませんよぉ」
さやか「その男の人って何歳くらい？」
香織「多分、３０歳前半だと思いますけど・・・」
さやか「えーっ！　大の大人じゃん！」
香織「大人っても、すごい気が小さいんですよ、私が少しでも怒鳴ったり脅したりするだけでビクビクしちゃって」
さやか「えー、面白そうじゃん！」
香織「先輩もいじめちゃってくださいよ」
さやか「いじめようかな・・・私Ｓだし・・・」
　彼女の言うとおり、青柳さやかは本当に真性Ｓ女なのだ。しかも異常なほどに・・・
香織「私、そいつの居場所教えるんで」
さやか「その男の人を暴行したりして、何かやばい事にならない？」
香織「大丈夫ですよ、力でねじ伏せて、口で聞かせて、体で覚えさせれば」
さやか「ありがとう、“たっぷり楽しませてもらおう”」
　野村高夫はそんな事も知らずにぐっすりと夢の中にいるのである。（未完）